

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第28回 エクアドル

ハイメ・バルベリス

駐日エクアドル大使

「ドル化」により安定した エクアドル経済

— 優先政策は外資導入 —



わが国とエクアドルは本年外交関係樹立 100 周年を迎えたが、エクアドルのハイメ・バルベリス駐日大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、エクアドル現政権の基本政策、「ドル化」政策、地域統合、対日関係、中国・韓国との関係などについて見解を表明した。

バルベリス大使は駐ジュネーブ国連代表部書記官、駐米大使館参事官、アジア・アフリカ・オセアニア局長、アメリカ局長、駐ハンブルグ（ドイツ）総領事、米州機構（OAS）代表部代表代行、国家主権局長、国家主権国境関係担当次官、北米欧州担当次官などを歴任後、2017 年 4 月から駐日エクアドル共和国特命全権大使。

インタビューの一問一答は次のとおり。

— 大使は日本に着任されて1年余りになりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか？これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 日本に着任して1年半近くになりますが、私にとって日本は友好的で寛大な国です。お陰で日本滞在はきわめて快適であり、両国間の友好協力関係増進のために働けることは大きな喜びです。日本の政府関係者の方々には効率的で、また民間企業の方々には行動力に富んでおり、仕事やし易いです。

日本滞在中で最も印象深い思い出は天皇陛下への信任状の奉呈と広島・長崎の平和記念公園訪問です。またなによりも家族とともに京都や日光の神社、仏閣を観て回れたことが嬉しく、さらにはそれまであまり知らなかった日本料理を味わえたこと、そして東京の街を自転車で散策できたことも楽しい思い出です。

— 前ラファエル・コレア政権（3期10年）は「市民革命」の名のもとに社会主義的政策を採用しました。そして現モレノ大統領は第2期コレア政権の副大統領を務められましたが、現政権は「大きな政府」路線は継承するものの、反米路線は見直すといわれています。

現モレノ政権と前コレア政権の政策上の基本的な相違点、並びに現政権にとっての今後の最優先課題、挑戦は何でしょうか。

大使 前政権と現政権の政策上の違いは、現在のエクアドルにとって国民のさらなる発展と福祉のためには対外的により開かれた経済を必要としているということから来ています。そのためエクアドル社会のすべての部門の参画が奨励されています。国家開発計画（2017～21年）に盛り込まれている現モレノ政権の優先政策は、憲法および法律に規定されている個人と自然の権利の保証、社会的、連带的経済システ

ムの強化および透明性と連帯に基づく新しい社会倫理の構築を促進するということです。

政府の優先政策の一つは新規外資の導入で、そのために種々の方策を講じています。政府としては2018～19年に70億米ドル以上の投資を期待しています。これらの投資には課税額逡減の恩恵が得られます。

モレノ政権のその他のチャレンジとしては、弱者のための社会政策の推進、貧困、差別および暴力の追放、障害者保護並びに男女平等政策の促進および国家権力の強化などがあります。

— エクアドルは2000年に自国通貨を放棄し、「ドル化」政策に転じて17年になります。

「大きな政府」路線と「ドル化」政策の両立は難しいのではないかと考えられますが、いかがでしょうか。

大使 ご指摘のとおり、エクアドルは17年前に自国通貨（スクレ貨）を放棄し、米ドルを国内通貨として採用しました。2000年の「ドル化」以降、歴代の政府はそのイデオロギーに関係なく同政策を堅持しており、お陰でそれまで永らく苦しんできたハイパーインフレに終止符を打ち、インフレを抑えることが可能となり、経済の安定並びに一人当たり所得の2倍以上への拡大を達成することができました。「ドル化」政策は歴代の政権の経済政策とも両立しています。

— 多様性に富むラテンアメリカ地域においてはそれぞれの国のニーズを満たすような地域統合システムの模索は今後も続くと思われませんが、資源豊かな太平洋国家であるエクアドルとしては、今後「太平洋同盟」、「メルコスール（南米南部共同市場）」、「TPP」等に対処される方針でしょうか。

大使 エクアドルの憲法は地域統合を奨励しています。過去数十年にわたりエクアドルは、エクアドル人の発展と福祉のためのメカニズムとして地域統合を促進してきました。現在エクアドルはアンデス統合、南米諸国連合（UNASUR）およびラテンアメリカ・カリブ諸国共同体（CELAC）の加盟国で、UNASURの事務局はキトにあります。またCELACはアジアを含む他の地域との関係強化にも成功しています。そして地域統合促進の観点から、エクアドルは太平洋同盟、メルコスールおよびTPPの動きをも注視しています。これらの地域統合メカニズムへのエクアドルの参加については、同機構の今後の進捗状況次第であり、それがエクアドル人の繁栄にとってプラスかどうか

かを見つつ判断することとなるでしょう。

— 中国、韓国エクアドルへの進出の現状と見通しはいかがでしょう。

大使 現在エクアドルは中国および韓国と友好協力関係を維持しています。それは両国との共通の価値観ならびに政策的合致によるもので、特に貿易と投資が活発です。中国は水力発電所建設や鉱業等の戦略的部門で活発です。韓国は自動車や家電等の分野での重要な貿易パートナーです。両国との今後の関係については政治、経済および貿易の分野における相互利益の推移によると言えるでしょう。

— 日本とエクアドルは今年外交関係樹立100周年を迎えましたが、これまでの両国間関係及び現状をどう見ておられますか。また、100周年後の両国関係を一層促進、発展させるためには何が必要だとお考えですか。

大使 まさに本年はエクアドルと日本の外交関係樹立100周年に当たります。過去100年間の二国間関係はすべての分野において実り多い交流がありました。モレノ大統領が表明されたとおり、両国間の友好協力関係は素晴らしいレベルに達しています。本年は首脳レベルの会合をはじめ、貿易及び投資の実質的強化に向けた具体的行動の促進、文化、学術交流の振興など、二国間関係緊密化の絶好の機会となっています。

— 日本の政府および民間に期待されることは？

大使 エクアドルは日本の政府・民間部門ともに両国間の友好協力関係を強化するためにあらゆる潜在的可能性を追究されるよう期待しています。また、日本の民間企業については、エクアドルに対するより一層の信頼と、エクアドルとの投資・貿易の拡大を強く期待しています。エクアドルは日本が戦略的パートナーであり、両国の経済は相互補完的であると考えています。したがって、両国間関係は今後大いに発展し得ると期待しています

— 日本の企業がエクアドルに進出すれば有望であると思われる分野はありますか。

大使 昨年12月、エクアドルのカンパナ貿易相が来日し、エクアドルの戦略的分野への日本の投資を勧誘するとともに、エクアドルにおけるビジネス・チャンスを紹介しました。エクアドル政府は少なくとも

も29件 330億ドルにのぼるプロジェクトへの新規の直接外国投資を見込んでいます。

貿易相が日本側に提示したプロジェクトには太平洋岸の製油所建設計画、サンティアゴ河水力発電所とパッケージのアルミ鋳造所建設計画、ジュリマグァ鉱山の銅の鋳造・精練所建設計画などがあります。また、同大臣は7件の道路建設計画および1件の紙パルプ工場建設計画も提示しました。

われわれは日本の企業がエクアドルの豊富な資源と日本の高度な技術を活用してエクアドルに投資されれば、成功する可能性の高い分野は多岐にわたるであろうと見えています。

— 首都キトは世界で初めてユネスコ「世界文化遺産」に指定された極めて魅力的な都市であり、北半球と南半球を2本の足でまたげる地点や「世界自然遺産」のガラパゴスもあります。日本からのエコツーリズム、文化、学术交流の促進等の可能性についてはいかがでしょうか。

大使 エクアドルにはキトとガラパゴスのみならず全土にわたって魅力的な観光地が沢山あります。ガラパゴス諸島、太平洋沿岸、アンデス地域およびアマゾン地域という4つの世界が存在します。一つの国に4つの世界が北半球と南半球を股にかけて存在し、

極めて多様な生態系を有するというユニークな環境のもとで、エクアドルはエコツーリズムにとって最適の地であり、その振興に努めています。エクアドルは同国の自然の美しさと生物多様性において世界のトップ17か国の一つであることを評価される訪問者や観光客の来訪を歓迎します。

文化、学术交流の振興については、両国間関係を強化する上でこの分野の可能性は絶大であると言えます。しかし残念ながらこれまで十分に活用されてはきませんでした。エクアドルと日本の二国間関係の重要な基軸として文化、学术交流の強化が必要であると考えます。

— 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありませんか。

大使 貴協会が日本とラテンアメリカおよびカリブ諸国との間の相互理解と緊密化に果たされている役割に対し敬意を表したいと思えます。21世紀に入りラテンアメリカと日本との関係は一層緊密化しており、ラテンアメリカ協会の役割は今後ますます高まっていくであろうとの貴協会会長のメッセージには心より賛同いたします。

(インタビュアー ラテンアメリカ協会監事、前副会長 伊藤昌輝)

ラテンアメリカ参考図書案内



『CHOCOLATE』

— チョコレートの歴史、カカオ豆の種類、味わい方とそのレシピ —

ドム・ラムジー 夏目大・湊麻里・渡邊真理・鍋倉僚介・西川知佐・葉山亜由美・田口明子・定木大介訳 224頁 東京書籍 3,200円+税 ISBN978-4-487-81077-2

チョコレートの原料であるカカオの原産地は、中央アメリカとアマゾン河流域と言われ、16世紀にアステカ文明でも飲み物に加工されて珍重されていた。スペイン人やフランス人により熱帯地域のカリブ海地域やその後アフリカにも植えられ世界各地に広まった。滋養強壮効果があると言われたが、初めは単にスパイスの効いた苦い飲み物であったのを、欧州に持ち込まれ300年の時間を経て19世紀には焙煎されたカカオ豆の脂肪分を低コストで除去する技術が開発され、固形チョコレート、ミルクチョコレートが作られて爆発的に人々の嗜好品として広まった。

本書は、チョコレートの歴史、カカオ豆の種類、栽培から生育、カカオの国際取引、チョコレートの製造、方法、種類、選び方と味わい方、作り方のレシピ、楽しみ方など、チョコレートのすべてについてカラーの写真・図解で解説している。「チョコレートの旅する」という40頁を割いた項ではアフリカ、カリブ海、南米、北米、アジア・オセアニアの産地28か国を訪れ、栽培地域、収穫期、生産量、主要栽培品種、特色を各1ページで説明しており、ラテンアメリカではドミニカ共和国、グレナダ、セントルシア、トリニダード・トバゴ、キューバ、エクアドル、ベネズエラ、ブラジル、コロンビア、ペルー、ボリビア、ホンジュラス、ニカラグア、メキシコ、コスタリカを取り上げている。

(桜井 敏浩)